

令和二年二月一日発行 第二十卷第二号 通巻第三四四号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

# 槐 かい

岡井省二創刊

令和2年2月号



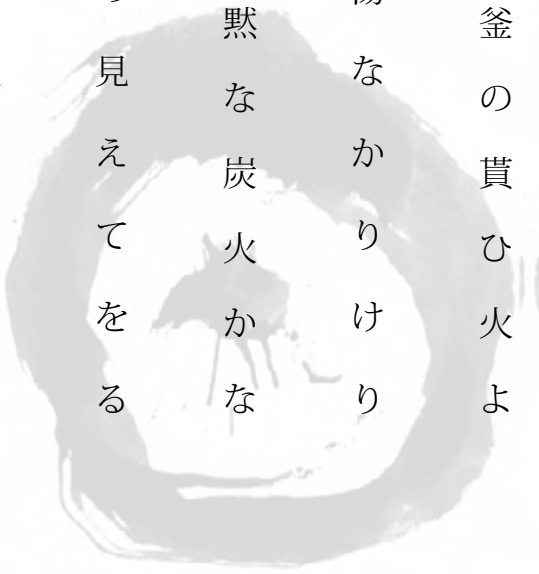
# 狐火

高橋将夫

大根の数だけ穴が残るなり  
達磨忌や雲に坐つてゐる遠磨  
実態は煙なりけり帰り花  
鮫鱈の提灯恋に揺れにけり

日だまりの少女は冬の蝶となる  
心中も姦通も死語近松忌

御火焚は地獄の釜の貫ひ火よ  
狸汁秘湯に秘湯なかりけり  
饒舌な護摩火寡黙な炭火かな  
狐火を操る糸の見えてをる  
北窓をふさぎ心に灯をともす



# 槐安集

加藤みき

お降りや今年は忘れものすまじ  
踏んばつて鰯を捌きし女人なり  
陰膳に太箸並べみたりける  
鴛鴦やまさに醜女の深なさけ  
龍の玉にこにこと顔そこにあり

中島陽華

ちんかたの下駄でゆくなり月の橋  
うぶすなの杉のチップと落鮎と  
红柿やかんらんらと笑ふ母  
重陽の四つ目の犬に逝かれけり  
大丈夫とは此れ焦げたるむかご飯

竹内悦子

蓮の実のつんつん踊る交叉点  
青空に巨頭鯨浮かぶ石路の花  
空海が逢ひに来てをり昼の月  
留袖の人と出逢へり水木の実  
金銀の鶴並べあり年の家

雨村敏子

三面鏡立冬の眉引いてをる  
山姥の乗り込んで来し始発バス  
北風にむかひ右手を高く振る  
櫻紅葉の奥に入りけり尉と姥  
鬼柚子の南半分暮れにける



本多俊子

新盆や飾れば飾るほど涙して  
うすらいを鋭くよぎる鳥の影  
雉子の尾の飛ぶも走るも水平に  
耕しし畑に月影生まれけり  
余生にも直線・曲線星月夜

近藤喜子

鶴悼わたる先頭ふつと雲の中  
残る虫に五分の魂ありにけり  
地の神の囁きのやう冬すみれ  
枯芝に身のほこほこと小宇宙  
冬の川みつめ日暮れの底にゐる

瀬川公馨

赤光を止めてゐたり芋の露  
アメダスに石露の葉と黄の花と  
飽食の廬舎那佛なり秋の暮  
子を連れて芋飯ごつこ日暮れ来る  
狐火の中に狐の踊りたる

柳川晋

冬瓜になんの愛想もなかりけり  
死神もまつたり隣る日向ぼこ  
人生を全部あつめて焚火かな  
数へ日を微分積分して延ばす  
カリスマがなんぼのもんぢや年用意

熊川 暁子

秋風を身巾身丈に着て歩む  
遠く来て花野に下車をしたる女  
いわし雲子規の仰臥の無重力  
雪吊りが空ひき絞る加賀の国  
枝豆のこんなな青き倭かな

江島 照美

狂ひ花べーとーベンを聞いたのよ  
銀杏のやはき果肉はつぶさるる  
通草の実開けば二度と閉ぢられぬ  
一言が今からを変ふ冬薔薇  
本心は離したくない暖鳥

寺田 すぐ江

凜<sup>悼</sup>りと鷹渡りたる空の青  
白鳥の白や名残りの空となる  
対岸に手を振る人や龍の玉  
この先は風まかせなり木の葉髪  
降るほどの星のきらめき鳩の湖

岩下 芳子

恭しく祓ひ給ひし今年米  
石路咲いて酒蔵の街明るうす  
紺碧の空定まりし芒原  
団栗の丸き長きも個性かな  
時雨るるや残りし一葉離れざる

有松洋子

叩かれてしあはせさうな干布団  
冬木立人の温みを歓迎す  
人間を見続く狛へ小春風  
トロットで行く馬二頭落葉道  
冬鷗海荒るる日の眼に力

岩月優美子

大鶴悼の一羽まほうへ飛び立てり  
白鳥の歌天網を揺れしけり  
小春日や石の地蔵のかはいさよ  
天真のかがやき銀杏散りにけり  
熊手売る声に元気を貰ひたる

近藤紀子

祈り捧ぐ教皇の背の光かな  
白秋の雨教皇の御衣にも  
酸橘かぼす柚子の成り年他所の庭  
すきとほる袖ジャムの黄や青い空  
冬瓜の皮を厚めに剥く夕べ

竹中一花

宵闇の灯しに浮かぶ青不動  
北風の街に阿闍梨の加持を待つ  
夜業する匠の腕に神楽面  
緑青の欄干比叡に雁渡る  
水音は遠し榎植の実の重し

前田美恵子

墨を磨る男語らず福寿草  
古曆生ききたる証残しをり  
惜まれて旅へ踏み出す小春かな  
大欠伸する子ぐづる子七五三  
厳寒の磯辺に話し声のあり

中田禎子

石露光る日々好日の脳ひとつ  
老猫の唸り声あり冬の月  
裸木に描く心の平面図  
梟や眠れぬ夜の宝探し  
冬の月男の仮面外しけり

吉田順子

銀漢悼や恩師は夢寐に入りたる  
天空をなだれし銀杏黄葉かな  
立冬や身を軽くせし庭の木々  
人声のかたまりて来る大枯野  
一湾の波と照り合ふ蜜柑山





# 槐市集

阿部さちよ

避難所はここと決めけり秋出水  
濁流の果てて影濃き水の秋  
らふそくの炎の記憶大野分  
明日もまた夕陽浴びんと赤とんぼ  
まだ死なぬ夜長の苦悶聞きにけり

出利葉孝

歩くごと柘目は踊る刈田かな  
スランプに拳を上げる神無月  
音もなく縁側に坐す月明り  
鉄塔に月がぶすりと突き刺さり  
縁側で軀こつくり秋日差す

橋本順子

黄落や大樹の洞に手を合はす  
拍手の音の広がり秋の水  
秋遍路日のぬくもりの石に座す  
水鳥の群れたるままに遠ざかる  
月光や古墳の壁画濡れてをる

平野多聞

草の露に包まれてある命かな  
運動会空の優しき陰落ちて  
霜月は企業戦士に律儀問ひ  
蚯蚓鳴く神にあそびがあるのなら  
どれどれと栗の実拾ふ秋拾ふ



藤田美耶子

コスモスや夢の色して風の中  
守護神に守られて行く大枯野  
つくばひの水涸れしまま夕蜻蛉  
黒谷や紅葉の奥にまた紅葉  
胸底の壺庭にあり冬すみれ

三浦純子

冬来たる刹那に香る向ひ風  
縁側で見守る息吹松の雪  
鐘の音や落葉踏みしめ永源寺  
久々に友と語りし小六月  
猿まわし紅葉に染まり絵となりぬ

三木 亨

すれ違ふ人の残像冬初め  
吹き溜り自由とまどふ落葉かな  
見通しの悪しき生き方蓮根掘る  
べつたらの味見と摘むネイル過美  
布団干す大航海の夢の跡

安野眞澄

干柿の夜をつむぎて熟るるまで  
生き方は十人十色大花野  
鹿の眼の濡れ飛火野の星あかり  
琵琶湖より日暮急ぐや秋夕焼  
寺道や笑顔を人に花八手

柳橋繁子

手のひらの木綿豆腐や今朝の冬  
禁断の蜜入り林檎注文す  
ひよんの実や森を揺さぶる風の音  
舞殿の四神の旗や七五三  
宇佐宮は母のふるさと神楽月

山田佳子

偏差値の如何の斯うのと栗を剥く  
相愛の舞かも知れぬ鶴跳ねて  
冬隣古寺の石塔日を集め  
夕暮の花石路曲がつてをりにけり  
絶滅の山犬捜す奥吉野

# 槐集

## 高橋将夫選

十國に隣る信濃や罽雲  
大阪 平野 多聞

行く秋に我がアリバイを残し置く  
茶が咲いて馬齢に加速つきにけり  
星飛んでその刹那なる梵語かな  
天道に尺取虫のごとく居る  
月光に電波時計の狂ひ初む  
現実を受け入れられぬ雪女  
クリムトの黄金むせぶ黄落期  
嵐去り街に伸びやか祭笛  
川の面に紅の波立つ夕紅葉  
蔵はいま麴の息吹雁渡る  
冬の蜂死して威嚇の羽根上ぐる  
冬耕の畝の曲がりや私流  
干柿の色に暮れたし明日かな  
紅に重さありけり冬薔薇

藤田美耶子

枚方 中 貞子

衝撃も歴史となりぬ三島の忌  
芦屋 田中 信行

法被着た杜長が注ぐ今年酒  
文春砲また炸裂し憂国忌  
人込みの海へ漕ぎ出す師走かな  
シャンパンの泡に溶け込む冬の月  
野分立つ幸も不幸も突然に  
守口 中西 厚子  
秘密知り黙を貫く昼の月  
無月なりねぢれの位置の二人かな  
我だけが知りたる夜の長さかな  
秋の町雲が作れる蜃気楼  
聖者なほ核廃絶を説く初冬  
枚方 高野 昌代  
果てぬ夢存分に詰め羽根布団  
人の世を救ふは人間鳥渡る  
逝く時に持ちゆきたきはスキー板  
想ひ出の粧ふ山を折りたたむ

# 銀河往来

十國に隣る信濃や鰯雲 平野 多聞  
信濃は越後、美濃、三河、甲斐の国など十國に隣接していた。  
信濃の鰯雲が十國を睥睨する句の姿がいい。信濃の風土がしつかり伝わってくる。

〈行く秋に我がアリバイを残し置く〉へ茶が咲いて馬蹄に加速つきにけり〉へ天道に尺取虫のごとく居る〉の句、どの句にもこの作者ならではの視点がある。

月光に電波時計の狂ひ初む 藤田美耶子  
電波時計は標準時を伝える電波を受信して誤差を自動修正するので、常に正確である。それが月光で狂うことなどないのが、言われてみると月光にはそんな怪しさがありそう。

〈現実を受け入れられぬ雪女〉の句、この雪女は自分が雪女であるという現実をどうしても受け入れぬらしい。誰にでも現実を受け入れ難い時がある。

蔵はいま麴の息吹雁渡る 中 貞子  
秋の渡り鳥の景と新酒の酒蔵の景のコラボ。

〈冬の蜂死して威嚇の羽根上ぐる〉は、冬の蜂の死の姿をしかと捉えている。

〈冬耕の畝の曲がりや私流〉の「畝の曲がりや私流」はなんともほほえましい。

〈干柿の色に暮れたし明日かな〉の「干柿の色に暮れる」の感性に共感。

文春砲また炸裂し憂国忌 田中 信行  
憂国忌は三島由紀夫の忌日。週刊誌がまた何か憂国の記事を暴露したのだろう。

〈人込みの海へ漕ぎ出す師走かな〉は比喻がいい。  
〈シャンパンの泡に溶け込む冬の月〉の感性に共感。

秘密知り黙を貫く昼の月 中西 厚子  
昼の月は目立たずに沈黙している。夜に見た秘密を口に出すこともなく。

果てぬ夢存分に詰め羽根布団 高野 昌代  
そうか、柔らかな羽根布団のふくらみには見果てぬ夢が詰まっていたのか。

〈人の世を救ふは人間鳥渡る〉の句、まさにその通りだと思っ

冬の月たかぶりしもの皆しずめ 柴田 靖子  
冷たい冬の月の光にはたしかにそんなところがある。

小春日は口溶けのよきチョコレート 三木 亨  
「口溶けのよいチョコレート」の比喻がユニーク。

小春日や天女羽衣置き忘る 久保 夢女  
天女が羽衣を置き忘れる。小春日はたしかにそんな日和だ。

水澄めり隠し事ならバレてます 井上 静子  
「隠し事ならバレてます」の口語体が活きている。  
〈女狐の追ひかけ来るも振り向かず〉は不思議な一句。